

れ、また大橋綾子氏（郡山女子大学教授）の特別講演「大学開放による高齢者教育の日米比較」があった。

一般報告は75題の多きを数えたが、本研究所の内野澄子部長が「熊本県における高齢人口の移動と特徴」について報告し、現地の注目を浴びた。その他の報告の中で人口に関わるものを挙げてみると、「過疎地域における高齢者問題—鹿児島県川辺郡大浦町（老年人口 29.1%）の場合—」（染谷淑子）、「死亡統計からみた老人の自殺」（篠野脩一ほか）、「小地域からみた高齢者の余命とその特色に関する一考察」（前田正久ほか）などである。

（山口喜一記）

第59回日本社会学会大会

昭和61年11月23日・24日の両日、山口大学において第59回日本社会学会大会が開催され、本研究所からは阿藤誠、若林敬子の両名が参加した。

例年、社会学会大会の一般研究報告の部会には、細々ながら人口部会が設けられてきたが、本年の大会では遂に人口部会が姿を消してしまった。わが国では社会学のカリキュラムで人口統計学、人口問題を講ずる大学がほとんどなく、それが社会学会における人口研究への関心の低さにつながっている。米国の社会学会における人口研究の浸透ぶりと比較すると誠に残念な状況と言わざるをえない。

ただし、人口部会はなかったが、個別的には人口研究に直接関連した報告がなかった訳ではない。都市部会における「人口再分布と都市開発—神戸市、シンガポールを中心とする国際会議から—」（黒田俊夫）、地域問題部会の「人口急増都市における都市形成と社会計画—岐阜県可児市を事例に—」（加藤晴明・佐野勝隆）、女性部会の「出産から見た日本近代」（落合恵美子）、社会移動部会の「明治・大正期における府県間移住の対数線形モデル—大正9年第一回国勢調査データの分析—」（都筑一治）などがその例である。

一般研究報告の他に、本大会では四つのテーマ部会が設けられ、いずれも盛況であった。そのうちのひとつ「高齢化社会の問題」は市民にも公開され、地元に関心を呼んだ。司会は青井和夫、庄司洋子の両氏、報告は「日本人口の将来—超高齢社会の構図—」（阿藤誠）、「高齢化社会の社会学的課題」（小川全夫）、「都市の高齢者とコミュニティ」（金子勇）の三つからなり、杉正孝、中垣昌美の両氏が討論を行った。阿藤報告は本研究所の最新の将来推計人口をベースにして、わが国の高齢化の特徴と高齢化の社会経済的影響を広範囲に論じた。小川報告は地元山口県の実例を踏まえて高齢化の地域社会への影響を論じ、さらに高齢化問題への社会学的介入の方法についても言及した。金子報告は都市の高齢者の社会的ネットワークに関する調査データの統計分析を通じて、都市型高齢化社会におけるコミュニティ形式の明るい可能性について論じた。高齢化社会の問題は今後2年間テーマ部会でとりあげられるとのことで、具体的問題を踏まえて、さらに議論が深まることが期待される。

（阿藤 誠記）

第5回国際ふたご研究会議

第5回国際ふたご研究会議が1986年9月15日から19日にかけてオランダのアムステルダムで開催され、日本から筆者（今泉）を含めた6名が参加した。この会議は3年ごとに開催されており、今回は25か国から200名以上が参加した。なお、筆者は“A recent trend of multiple births in Japan”について研究発表を行った。

この会議のプログラムは以下のものである。なお、会議録は1987年に刊行される予定である。

Presidential address

W. E. Nance

Three lectures

1. In vitro fertilization and twinning
2. Twin research in coronary heart disease
3. The future of twin research

R. G. Edwards
K. Berg
L. Gedda